

提出日：令和 3 年 2 月 16 日

所 属： 獣医 学部 獣医 学科

氏 名： 長井 誠 職位： 教授

I ティーチング・ポートフォリオ

1. 教育の責任（教育活動の範囲）

高病原性鳥インフルエンザや豚熱など、我が国の畜産業に大きな経済損失を与える家畜の伝染病が発生している。犬や猫も含め家畜には様々な伝染病があり、獣医師はこれらの疾病を制御していかなければならない。このために単に動物の伝染病を覚えるだけではなく、獣医師として何をすべきか、使命を自覚できる獣医師の育成を目指した授業・実習を実施することを責務と考えている。

科目名	学科・専攻	必, 選, 自	配当年次	受講者数
家畜伝染病学Ⅰ	獣医学科	必修	4	126
家畜伝染病学Ⅱ	獣医学科	必修	4	128
家畜伝染病学実習	獣医学科	必修	5	151
獣医学特論Ⅰ	獣医学科	必修	5	5
獣医学特論Ⅱ	獣医学科	必修	6	1
卒業論文研究	獣医学科	必修	6	2

2. 教育の理念（育てたい学生像, あり方, 信念）

伝染病には伝播力が強く、海の上を何十キロもわたるものもあれば、蚊のような媒介動物がないと伝播しないものもある。有効なワクチンが開発されているものもあれば、ワクチンの開発が困難なものもある。伝染病学としては、このような違いを覚えるのは大切なことではあるが、伝播しやすい伝染病は何故パンデミックを起こしやすいのか、ワクチンのできない伝染病はどうして開発が難しいのかなど疑問を持つことは大切である。それを理解しようと努力し、どう対処していったらよいかを積極的に考え、理解することのできる学生が理想の学生像と考える。過去に流行し、ヒトにも健康被害を与えてきた牛結核、ブルセラ病は、我が国では獣医師の努力によって清浄化を成し遂げた。しかし未だ清浄化できていない法定伝染病のヨーネ病をはじめとして、清浄化が望まれる数多くの伝染病が残されており、これからの世代の獣医師がこれらに取り組んでいかなければならない。このように獣医師は単に動物の医者なのではなく、獣医師しかできない社会的に大切な役割を果たしていく、これが獣医師のあり方と考える。伝染病学を通して、社会に貢献できる獣医師になるための基礎を学んでいただく、この信念に基づいた教育を展開してまいりたい。

3. 教育の方法（理念を実現するための考え方, 方法）

教科書を読み上げ、覚えてもらうだけでは伝染病に立ち向かえる獣医師は育たないと思う。動物の中には家畜のような経済動物もあれば、ペットのような伴侶動物もあり、同じような伝染病が発生しても、その対象によって取るべき手段は大きく異なる。清浄化を達成した伝染病においても、それぞれでアプローチが異なっている。様々な伝染病を丸暗記することだけでは、獣医師として現場で伝染病に遭遇した時に状況の応じた有効な策を講じていくのは難しいと思われる。いろんなケースの中で伝染病に対応する考え方を教えるに当たり、基本的なセオリーは大切だがそればかりでなく、具体的な事例をあげて理解を深めてもらうことが大切であり有用と考える。

私は家畜保健衛生所の獣医師として畜産の現場で数多くの伝染病に遭遇してきた。その経験の中からできるだけ多くの事例を紹介し、失敗事例も含めて獣医師としてどのように対応すればよいかを一緒に考えてもらうというアプローチを散りばめるよう心がけて教育を行っている。また実習においては、現場での発生事例を想定した病性鑑定を実施してもらい、実際の状況を体得できるよう心がけたい。また、それぞれ動物には飼い主がいて、飼い主の理解を得るのも大切な仕事である。診断結果を飼い主に伝えたり、防疫対策を指導したりする場合に大切なのは、理論的でわかりやすい説明である。実習のレポートは上記のことがトレーニングできるよう、課題を出して取り組んでもらう。

アクティブラーニングについての取組

- ・ 双方向の教育体制を構築するため、學理を利用したディスカッションを行う。
- ・ 毎回の授業で小テストを実施し、授業の理解度を把握する。

ICTの教育への活用

- ・ 學理を用い、その機能を最大限に活かし、授業や実習に利用する。

4. 教育方法の改善の取組（授業改善の活動）

- ①教育（授業、実習）の創意工夫（B）
- ②学生の理解度の把握（B）
- ③学生の自学自習を促すための工夫（C）
- ④学生とのコミュニケーション(質問への対応等)（B）
- ⑤双方向授業への工夫（B）

※A（十分実施している） B（実施しているが十分でない） C（うまく取り組めていない）

上記を鑑みて現在の授業実践・教授手法をどのように改善していますか。

伝染病は文章や口頭ではなかなかうまく伝わらないため、できるだけ多くの写真スライドを用いて授業を行っている。現在はデジタルカメラで現場での写真データを容易に得ることができるが、デジカメがない時代の症例については口頭で伝える手段しかない。この場合は時系列を整理し、その事例の問題点と取るべき対応策を理解してもらえよう、話し方に注意を払った。理解度のチェックは、毎回小テストを行って把握している。小テストは成績評価の項

目としているので、真剣に取り組んでもらっていると考え。授業に用いるすべてのスライドや資料は、学期の最初に學理にアップしているにもかかわらず、予習を行う学生が少ないので、この点は改善すべき事項として対応を考えているところである。質問への対応は學理の「ディスカッション」またはメールを通じて行っている。授業時間が過ぎて「ディスカッション」に入った質問に対する回答が遅れたことがあったが、以降授業が終わっても「ディスカッション」はチェックするように心がけている。

⑥国家試験対策としての取組

国家試験における出題傾向を過去 13 年分分析し、出題されやすい疾患や問われやすい事項を取りまとめて示し、重点的に取り組むべきことを明らかにしてきた。

5. 学生授業評価

①授業評価の結果をどのように授業に反映させたか。

授業評価では上述したように予習の取り組みが不足している傾向が明らかとなった。これについては上述のとおり私の課題であり、現在、予習の必要性について他の教員から情報を収集して対応策を考えているところである。細かい点では、資料を動物種ごとにファイルを分けてほしいとか、毎回の小テストを復習できるように選択肢も含めてアップしてほしいなどの学生の意見を取り入れて対応した。

② ①を受けての結果および③ ②を踏まえて次年度の取組み

まだ結果が見えてないが、次年度は同じ指摘がないように注意を払いたい。

6. 学生の学修成果

① 学生の成績向上に資する取組

授業の資料を早期に學理にアップする

毎回小テストを行う

②教育活動によって得られた学生の成果及び学生・第三者からの評価

まだ成果は得られていない。

7. 指導力向上のための取組（FD 研究会参加状況）

できるだけ毎回 FD 研究会等に参加している。

8. 今後の目標（理念の実現に向かう今後のマイルストーン）

短期的には、着任して現在 3 年目が終わろうとしている時点で、未だ授業と実習は細かい改善点が多くあるので、それを修正して納得できる授業と実習を行えるようになりたい。長期的には、卒業生に獣医師になって授業と実習が役になったと言われることを目指して、常に努力して改善しながら取り組んでいきたい。

9. 添付資料（根拠資料）（※）資料名のみ

なし